



## 授業支援・中小路小学校

### 6年総合学習・南極観測隊（越冬隊）体験談

11月26日（木）、中小路小学校で実施した授業支援を紹介します。6年生の総合的な学習の時間で取り組んでいる「将来の職業」の1つとして、南極観測隊の仕事を通して職業観を学ぶことがねらいです。日立理科クラブ支援員2名・南極観測隊OB2名、理科室のおじさん総勢5名で、2時間継続の授業が展開されました。南極観測隊OBの多賀正昭さんは、第8次・第12次・第21次の越冬隊員、滝川清さんは第16次・第27次の越冬隊員として参加しています。多賀さんは日製の大みか工場、滝川さんは日立工場に勤務し、モーターや発電機関係に従事していて、その手腕を買われて南極観測隊員に派遣されました。最初に南極に関する質問を投げかけたところ、男子児童が、模範解答をすらすらと述べていて、驚きました。南極に関する資料を分かりやすく写真やイラスト、映像などを交えてスクリーンに投影して説明が始まりました。南極大陸までの航路に要する時間や距離、準備物などの話は、実際に従事した体験ならではの面白い内容で、児童たちの真剣な眼差しや表情が印象的です。南極の氷の厚さが4000mもあり、地球全体の真水の90%は南極の氷という説明には、驚きの顔が見られました。また、日本の越冬隊員が最初に観測して発見したオゾンホールや南極の氷がすべて溶けたら、世界の海面は70mも上昇するという話にも興味を示していました。児童たちは、冬の南極は太陽が昇らず、夏は太陽が沈まないという不思議な現象も、説明の中でのほどと納得していました。ペンギンやアザラシの映像に思わずほほえんだり、氷上を走る雪上車のダイナミックな様子に歓声を上げたりと、時間の経過があっという間でした。オーロラの映像では、オーロラが音楽に合わせて映し出され、その神秘的な色合いと形に、児童たちは一瞬見とれて



一万年前の音が聞こえる。

「すごい!」と、声を発していました。休憩の後に、国立極地研究所から送られてきた実物の南極の氷を使った実験をしました。南極の氷は、何万年という年月を経て空気を閉じ込めてできた氷です。その氷を溶かすと、気泡が水中にあふれて音が聞こえます。児童たちは、砕いた南極の氷をコップに入れ、その様子を眺めたり、コップを耳に当てて音を聞いたりすると、まるで、南極の世界を日本で感じているようでした。最後に、キャリア教育の結びとして、「南極越冬隊員としての仕事の専門家は自分だけ、一生懸命自分の仕事をする事が大切です。」という事を強調して終わりました。

観測隊の服を試着した児童



すごく暑い!